

初期労働価値論と 「不変の価値尺度」問題

——ウィリアム・ペティとフランクリン——

新 村 聡

I はじめに

マルクスの労働価値論をめぐる最近の論争では、労働価値論の課題とはそもそも何か、価値の概念はなぜ必要なのかというもっとも基本的な問題が議論の焦点となっている。⁽¹⁾生産価格水準を決定するために労働価値論は不要であると主張するネオ・リカーディアンからの批判に対して、労働価値論を擁護する論者は、労働価値論の目的は利潤の本質が剰余価値にあることを示すことに、あるいは商品経済の特殊歴史的な社会的編成様式を解明することにあると反論する。この論争では、マルクスとせいぜいリカードの労働価値論のみがとり上げられ、ペティやフランクリン以来の初期労働価値論はほとんど考慮されていない。もちろんペティやフランクリンの労働価値論とマルクスのそれとは、理論の目的も性格も大きく異なっており、両者を安易に一括することはできない。にもかかわらず、歴史上最初に商品の価格から価値を明確に分離し、さらに後者を労働と結びつけた初期労働価値論の成立事情を考察することは、労働価値論の目的とは何かを考察するうえで重要な示唆を与えるように思われる。労働価値論の特質を学史的なパースペクティブの中で把握するための一つの手掛りを得ることを目的として、

(1) この論争については、両宮照雄「欧米価値論論争の意義」、『経済評論』1984年10月、を参照。

ペティとフランクリンの労働価値論が成立した理論的必然性を考察することが、この小論の課題である。

ペティやフランクリンの労働価値論は、いったいいかなる理論的課題を解決するために登場したのであろうか。労働価値論は一つの理論的解答であって、それがいかなる理論的課題を解決するために成立したのかを考えることなくしては、その特質を十分に把握することができないはずである。しかし従来の労働価値論史研究では、マルクスの労働価値論を理論的基準として前提した上で、それ以前の労働価値論の意義と限界を問うことに関心が集中し、さまざまな労働価値論の理論的課題が何であったのかについては、必ずしも十分な考察がなされてこなかった。ペティやフランクリンの労働価値論の理論的課題が何であるのか、それとスミスやリカードの労働価値論の課題とは何が共通し何が異なっているのかという問題は、問題として問うことすらもほとんど行われていないのである。

ペティやフランクリンの労働価値論が、マルクスの場合とは異なって、搾取の分析のために、あるいは商品経済の特殊歴史的な性格を明らかにするために提出されたのではないことは、あらためて指摘するまでもないであろう。では、ペティやフランクリンの労働価値論は、商品の相対価格水準の決定を説明するための理論であったのだろうか。ある意味ではそうだと言える。しかし、商品生産の当事者たちが、日常の商品交換において投下労働時間に基づいて交換比率を決定しており、その日常的な経験的意識をそのまま理論化したものが労働価値論であると考えれば、それは誤りである。複雑労働の単純労働への還元や、個別的労働と社会的必要労働との乖離の問題を別としても、多少とも発展した商品生産にあつては、商品生産の当事者が認識できるのはせいぜい直接的労働時間だけであり、他人から購買する原料や労働手段の生産に必要な間接的労働時間を認識することは、まず不可能である。ペティからマルクスにいたるまで、およそ労働価値論を主張した論者が示すのは常に仮設例であつて（ビーバーと鹿、リンネルと上着を想起せよ）、労働価値

論が妥当する实例を示した人物は一人もない。また、初期労働価値論では、穀物と貨幣との交換が例として示されるが、ペティの時代から穀物の価格には地代部分が含まれており、現実には等労働量交換が行われていたわけではなかった。労働価値論は、商品価格に関する人々の日常的な経験から直ちに引き出された理論ではなく、ある問題設定と理論的前提のもとでの論理的な要請から導き出された高度に抽象的な理論なのである。では、初期労働価値論の理論的課題とは何であったのだろうか。

労働価値論が成立した理論的必然性を考察する上でとくに注目すべきなのは、労働価値論と貨幣論とりわけ貨幣数量説との関連である。労働価値論を主張した経済学者の中で、労働価値論と貨幣数量説とが理論的に矛盾すると考えたのはマルクスただ一人であった。ペティ、フランクリン、『貨幣公債利子論』の著者パルトニー、さらにスミスやリカードにいたるまで、いずれも貨幣数量説の理論的妥当性を否定してはいない。とりわけペティ、フランクリン、パルトニーの場合には、労働価値論と貨幣数量説とは密接な関連をもって主張されている。⁽²⁾ところが、従来の労働価値論史研究では、労働価値論と貨幣数量説とを対立的に捉えたマルクスの理論が暗黙のうちに前提されているために、初期労働価値論と結びついている貨幣数量説はまったく無視さ

(2) ウィリアム・パルトニー(William Pulteney)は、マルクスに高く評価された匿名パンフレット『貨幣・公債利子論』(1738年)の中で、生活必需品の価格騰貴の原因が利子率の低下にではなく貨幣価値の低下にあることを主張し、その文脈で労働価値論を述べている。パルトニーの労働価値論は、貨幣価値変動論の問題を考察するために必要とされたのである。この文献については、小林昇「初期利子論史・労働価値論史上の一文獻」、『経済学史著作集Ⅲ』未来社、1976年、所収、を参照。

スミスの労働価値論も、貨幣数量説や不変の価値尺度の問題と密接に関連している。拙稿「スミス価値論の成立過程」、早坂忠編『古典派経済学研究(Ⅲ)』雄松堂、1986年、所収、参照。なお、古典派における労働価値論と価値尺度論との関連については、Will E. Mason, 'The labor theory of value and gold: real and nominal standards of value—and implications for the current reconsideration of the gold standard', *History of Political Economy*, Vol. 14, No. 4, 1982, を参照。

れるか、あるいは「労働価値論とは整合しない理論的要素をも並存させている⁽³⁾」という一言で片づけられてきたのである。

とくにマルクスが『経済学批判』において過去の諸理論を検討するさいにとった方法は、その後の労働価値論史研究に大きな影響を与えてきたように思われる。マルクスは、『経済学批判』において、学史的分析を三箇所に分けて行っている。すなわち商品論のあとに「商品の分析の史的考察」を、また価値尺度論のあとに「貨幣の度量単位に関する諸理論」を、そして貨幣論全体のあとに「流通手段と貨幣にかんする諸理論」を検討している。マルクスはかれ自身の理論を基準として、過去の諸理論の発展を整理したのであり、このような理論的アプローチの方法それ自体は学説史研究の一方法としてとくに非難されるべきものではない。しかしマルクス以後の研究者は、マルクスが一定の視点から取り出した諸理論の系譜を、あたかも経済理論の自律的な発展のように捉えて来なかつただろうか。労働価値論と価値尺度論および貨幣数量説とが、換言すれば商品分析と貨幣分析とが、それぞれ別個に発展してきたという錯覚に陥らなかつただろうか。マルクス以前の経済理論には、商品論と貨幣論との厳密な区別は存在していない。ペティ以来の労働価値論は、つねに貨幣についての考察、とりわけ価値尺度論や貨幣数量説と密接な関連をもって登場している。このことは何を意味するのだろうか。以下では、ペティとフランクリンの労働価値論が成立した理論的必然性を、とくに貨幣論との関連に注意を払いつつ検討していきたい。

II ウィリアム・ペティ

ウィリアム・ペティは、ピューリタン革命後に、クロムウエルのアイルランド派遣軍の軍医総監となり、反乱者から没収した土地の測量（ダウン・サーベイ）と分配の事業を指揮する。このアイルランドでの経験を踏まえて、

(3) 小林昇『経済学史著作集Ⅰ』未来社、1976年、p. 366。

ペティが王政復古後の財政危機に対処する処方箋として執筆した書物が『租税貢納論』(1662年)⁽⁴⁾である。財政問題を考察したこの書物は、第1～2章が経費論を、第3～15章が公収入論を扱っており、ペティの労働価値論と解釈される記述は、地租を論じた第4章と第5章に含まれている。注目されるのは、ペティが第4章と第5章において、労働価値論として解釈されるよく似た記述を2度繰り返していることである。地租を主題とする第4～5章の内容は、(1)土地と家屋にたいする租税の得失を論じた部分、(2)地代と利子の「神秘的性質」を考察した「余論」、(3)本来の主題である「地代を計算する方法」の考察、に大きく三分することができる。ペティは、地代と利子の「神秘的性質」を考察した「余論」において、貨幣地代水準の決定をもっとも中心的な問題として議論しており、次に「地代を計算する方法」を考察した部分でも再び同じ問題を論じているから、結局、よく似た議論を2度くりかえすことになったのである。地租は貨幣地代に対して一定の比率で課税されたから、地租を考察する第4～5章の最大の理論的問題は、土地の貨幣地代をいかに計算するのかという点にあった。おそらくそのことが、ペティがこの問題をくりかえして議論した最大の理由であろう。この反復された部分に、ペティの労働価値論と従来言われてきた記述が含まれている。ペティはなぜ労働価値論を主張したのだろうか。それは真に労働価値論と呼ぶにふさわしい理論であったのだろうか。以下では、ペティの叙述にそって順に考察していくことにしよう。

ペティは、地代の「神秘的な性質」を考察した「余論」において、貨幣地代の決定を二段階に分けて考察している。すなわち、まず穀物地代がいかに

(4) Sir William Petty, *A Treatise on Taxes and Contributions*, 1662, in *The Economic Writings of Sir William Petty*, ed. by C. H. Hull, Cambridge, 1899. 大内兵衛・松川七郎訳『租税貢納論』岩波文庫, 1952年。本書からの引用文は、本文中に *Treatise* と略記し、ページ数を付記する。なお、ペティの経済理論の時代背景は、松川七郎『ウィリアム・ペティ』[増補版]岩波書店, 1967年, に詳しい。

して決定されるのかを論じ、次にその穀物地代が貨幣地代にいかにして換算されるのかという問題に考察を進めていく。この第二の問題は、穀物と貨幣の交換比率すなわち穀物価格の決定に帰着し、そこにいわゆる労働価値論が登場することになるのである。

ペティによれば、穀物地代は、生産の諸費用を上回る生産物として次のように説明される。「この人〔穀物の栽培者〕が自分の収穫の生産高(proceed)から自分の種子を差し引き、さらに自分自身が食べたかまたは衣服や他の自然的必需品と交換に他人に与えた物も差し引いた時に、そこに残る穀物が、その年における土地の自然的実質地代である」(*Treatise*, p. 43, 訳 p. 76, []内は引用者。以下も同じ)。このように、穀物地代は総生産物の中から生産者が消費した「種子」、食料、「衣服」などの諸費用を差し引いて残る生産物にほかならない。ペティは続いて「この穀物すなわち地代が、どれほどのイングランド貨幣に値するか」という第二の問題に進み、次のような解答を与えている。

「それは、もう一人の人が貨幣の生産と製造とにもっぱら従事するとして、同じ時間(time)にかれの費用(expence)をこえて貯えうるだけの量の貨幣であると私は答える。すなわち、別の人が銀のある国へ旅行し、そこでそれを採掘し、精練して、他の人が穀物を栽培しているのと同じ場所へそれを持って来るとしよう。そしてそれを貨幣に鑄造する等々のことをし、また同じ人が、銀のために働いている間じゅう、生計に必要な食物も集め、衣服等々を手に入れるとしよう。私は、一方の銀が他方の穀物と等しい価値(value)に評価されなければならないと言う。一方はおそらく20オンス、他方は20ブッシェルであろう。そこから出てくるのは、この穀物1ブッシェルの価格が銀1オンスであるということである。

15. そして銀の採掘には穀物の栽培よりもいっそう多くの技術と危険とがありうるとしても、すべては同じことになる。というのは、100人の人に10年間穀物を生産させ、そして同数の人に同じ時間(time)銀を生産させるならば、

銀の純生産高 (neat proceed) が穀物の全純生産高の価格であり、前者の同部分は後者の同部分の価格であると言えるからである。」「[15.]は文節の番号でとくに意味はない」(Treatise, p.43, 訳77ページ)

この記述は、しばしばペティにおける労働価値論あるいは剰余価値論として理解されてきた。⁽⁵⁾はたしてそう解釈できるだろうか。

まず第一に、これはリカード的な意味での、すなわち同じ労働時間に生産される生産物は価値が等しいという意味での労働価値論ではない。そのことは、ペティがここで「同じ時間」に生産されたものとして等置している穀物と貨幣とは何かを見れば明らかである。ペティが等置しているのは、一方では「収穫の生産高」から「種子」、「自分自身が食べたもの」、「衣服や他の自然的必需品と交換に他人に与えたもの」などを差し引いた残りの「穀物すなわち地代」であり、もう一方は、貨幣の生産者が「食物」や「衣服」を消費し、そして「かれの費用をこえて貯えうだけの貨幣」である。すなわちペティが等置しているのは、穀物と貨幣の全生産物ではなく、純生産物だけにすぎない。かれは「銀の純生産高 (neat proceed) が穀物の全純生産高の価格である」とはっきり述べている。言い換えれば、ペティは、等しい労働時間が投下された生産物の価値が等しいと考えたのではなく、一定期間の労働が生みだす純生産物の価値が等しいと主張したのである。⁽⁶⁾

(5) マルクス以来の通説は、この文章が、(労働価値論を前提としつつも) 直接には剰余価値論を述べたものであると解釈している。松田弘三『科学的経済学の成立過程』有斐閣、1959年、33ページ、松川、前掲書、376ページなど。しかし他方で、この文章を後述の類似した記述と同一のものともみなした上で、両者とも労働価値論であると解釈する論者も多い。小林、前掲書、360ページ、渡邊輝雄『創設者の経済学』未来社、1961年、51ページなど。

(6) シュンペーターは、「今まで時としてペティに労働価値説創始の栄誉を与えようとする試みを支持するために使われてきた」この叙述は、「諸産業における利益の均等化への傾向」に関する認識を示すに過ぎないと主張している (Joseph A. Schumpeter, *History of Economic Analysis*, Oxford, 1954, p. 214, 東畑精一訳『経済分析の歴史』岩波書店、1956年、第2分冊、447—448ページ)。これとほぼ同様の見解は、馬

では、この記述は、剰余価値論として解釈できるだろうか。マルクスは「ペティの場合には、穀物の価値はそれに含まれている労働時間によって規定されており、地代は総生産物から賃銀と種子とを差し引いたものに等しいから、地代は事実上、〈剰余労働〉が対象化されている〈剰余生産物〉に等しい」と述べ、この文章を剰余価値論として解釈している。もしペティがここで労働価値論を前提としており、生産物の価値が労働のみの産物であると考えていたのなら、この文章は剰余価値論を述べていると解釈することもできる。しかしペティは、穀物地代の源泉が労働であると明示的に述べているわけではない。かれは「土地が富の母であるように、労働は富の父であり、その能動的要素である」(*Treatise*, p. 49, 訳119ページ)という周知の見解が示すように、土地と労働の両者を富の源泉と考えており、『アイルランドの政治的解剖』では、生産物のうちの賃銀部分が労働の産物であり、地代部分が土地の産物であると考えている⁽⁸⁾。また上述の引用文の直後では、「船も衣服も、土地とそこでの人間の労働の創造物である」(*Treatise*, p. 26, 訳79ページ)と述べている。ペティは、穀物地代を剰余労働の生産物としてではなく土地＝自然の産物として考えていたのであり、かれには剰余価値論はなかったと言うべきであ

渡尚憲「W. ペティの経済学(上)」, 東北大学『研究年報』第36巻第4号, 1975年, p. 153, 金子甫「土地と労働との関係についてのウィリアム・ペティの問題提起(上)——ペティからスミスへの労働概念の系譜——」, 龍谷大学『経済学経営論集』第23巻第3号, 1983年, 61～63ページ。

実際、アダム・スミスは、『法学講義』(Aノート)において、ペティと同じく銀生産と穀物生産のそれぞれに従事する100人の生産者を想定しながら、部門全体の「利潤」が両部門で等しくなることを指摘している。「もしわれわれが、鉱山で働く100人の人々と同数の人手と同額の費用とををかけて穀物を耕作する100人の人々を考えるならば、後者の利潤は前者よりも少なくないことが分かるであろう」と(Adam Smith, *Lectures on Jurisprudence*, Oxford, 1978, p. 357)。この認識は、『国富論』における「利潤の自然率」(平均利潤率)の認識へと発展した。

(7) K. Marx, *Theorien über den Mehrwert*, MEW, Bd. 26, S. 333, 全集訳, 第26巻I, 448ページ。

(8) Sir William Petty, *The Political Anatomy of Ireland*, London, 1691, pp.

(9)
ろう。

しかし同時に、ペティが、穀物の純生産物（＝地代）と銀の純生産物とを等置する基準を、土地ではなく「同じ時間」としていることに注意しなければならない。ペティは、生産物の価値源泉が労働だけであるとは考えなかったけれども、生産物が交換されるさいの基準としては労働を考えていたのであり、その限りで、労働価値論の方向へ一歩踏み出していたと言える。そのような把握を可能にしたのは、ペティの社会的分業の認識である。ペティは、穀物生産と銀の採掘とがいずれも同等の人間労働力の支出（「100人10年間」）であり、社会的総労働の一分枝をなすものとして等置されることを事実上把握していたからである。先の引用文を労働価値論ないし剰余価値論として解釈することはできないが、そこに抽象的人間労働の事実上の把握という点で労働の二重性の端緒的認識があることは注目しなければならないであろう。

ペティは以上のように穀物価格の決定を論じたあと、続いて、銀の数量の変化が商品の貨幣価格を変動させるといういわゆる貨幣数量説を述べて、不変の価値尺度の問題を新たに提起する。「もし銀が、さまざまな時代に、それが増減するために、それによって評価されるいくつかの物に対する比率を異にするならば、われわれは何か他の自然的標準および尺度（natural Standards and Measures）を検討するよう努力するであろう」（*Treatise*, p.44, 訳79ページ）と。すでに述べたように、ペティは地租の公平な課税のために貨幣地代と穀物の貨幣価格の決定を考察していた。もし貨幣の価値が減少して穀物価格が名目的に騰貴すれば、その結果、穀物地代の実質的価値は変わらなくても、名目的な貨幣地代と地租も増加することになるから、ペティにとって、穀物価格の変動は重要な理論的問題と考えられたのである。

63—4, 松川七郎訳『アイアランドの政治的解剖』岩波文庫, 1951年, 133ページ。

(9) 金子甫氏は、ペティの地代を剰余労働の対象化と解釈する「マルクスの見解は誤っている」と述べている。金子, 前掲論文, 61ページ。

地代の実質価値を測定するためには、たえず価値の変動する銀ではなくて、それ自身の価値が変動しない不変の価値尺度で価値を測らなくてはならない。不変の価値尺度の探究は、価値の原因が変化せずそれゆえ価値も変化しないような商品を探るか、あるいは価値の原因＝源泉そのものを価値尺度とするかのいずれかに帰着する。ペティがここで選んだのは後者の途であった。かれは言う。「すべてのものが、土地と労働という二つの自然的単位名称(natural Denominations)によって評価されるべきである。……われわれは、一つの船または衣服がこれこれの量の土地とこれこれの量の労働とに値する(worth)と言うべきである。というのは、船と衣服はともに、土地とそれに対する人間労働の生産物だからである」(Treatise, p. 44, 訳79ページ)。みられるようにペティは、貨幣に代わる「自然的価値尺度」(＝不変の価値尺度)として土地と労働とをあげている。この土地と労働は、価値の源泉であると同時に価値の尺度とされていることに注意しなければならない。ペティが土地と労働の両者を価値の源泉および尺度としたのは、銀や穀物などの使用価値を生産する具体的労働と、価値を生み出す同様な人間労働とを明確に区別していなかったからであり、⁽¹⁰⁾また実際の商品の価格に、土地の地代と労働の報酬の両者が含まれていたからであった。穀物の生産に土地と労働が必要であり、しかも穀物の価格に地代と賃銀が含まれるのだから、ペティが土地と労働を価値の源泉と考えたとしても少しも不思議なことではなかったのである。

しかし価値の尺度は一つでなくてはならない。ペティは、「土地と労働の間の自然的等価関係(a Natural Par)を発見できれば、われわれは喜ぶべきである」と言う。というのは、両者を相互に換算できれば、「土地と労働のいずれか一方だけで、両者によるのと同様にかあるいはそれ以上によく価値を表現できるようになる」からである。価値の源泉が労働と土地の二つである

(10) K. Marx, *Mehrwert*, MEW, Bd. 26, S. 337, 全集訳, 第26巻 I, 455ページ, 参照。

と考えたとしても、そのことからただちに理論的困難は生じない。現実の穀物価格には労働報酬部分と地代部分とが含まれているのだから、価値の源泉を二つと考える方がむしろ日常経験には適合的でした。貨幣という価値尺度が別に用意されている限り、土地と労働との二つを価値の源泉とすることに直接の理論的困難はなかった。ところが土地と労働を価値の源泉とするだけでなく、貨幣に代わる価値の尺度とする場合には、事情が異なる。価値尺度は一つでなければならない。二つの商品がいずれも土地と労働の生産物である場合に、土地と労働の二つを価値尺度とすると、二商品の価値を通約することが不可能になるからである。それゆえペティは、土地と労働との換算比率を発見して、価値尺度を労働に一元化しようと試みていく⁽¹¹⁾。

すでに述べたように、ペティは土地と労働を価値の源泉であると同時に価値の尺度であると考えたから、価値の尺度を労働に一元化することは、必然的に価値の源泉をも労働に一元化することを意味した。価値の源泉を労働に一元化するためには、地代の源泉が土地ではなく労働であると把握することが必要であり、さらにまた農業労働や鉱山労働などの現実の諸労働が同等な人間労働力の支出として社会的総労働の一分枝をなしており、その限りで価値を形成すると把握することが必要であった。ペティは、それを完遂することはできなかったが、その方向に大きな一歩を踏み出したのである。

ペティは、次の第5章で「地代を計算する方法」を論じ、穀物価格の決定について第4章とよく似た説明を繰り返している。以下の引用文は、しばしば前後の文脈をまったく無視して取り出されて、ペティにおける労働価値論の定式と解釈されてきたものである。

(11) ペティは『アイルランドの政治的解剖』において「いかにして土地と労働の間に等価と均等(a Par and Equation)を作りあげ、あらゆるものの価値を土地と労働のいずれか一方だけで表現するか」という問題を、「経済学におけるもっとも重要な考察」であると述べて、「日食料(days food)」を共通の尺度として、土地と労働とを換算しようと試みている。Petty, *Political Anatomy*, p.181, 訳133-134ページ。

「われわれが、名称と用語（ポンド、シリング、ペンスがそれにほかならない）で計算する場合に、貨幣の貯え(store)の変化は諸商品の比率(rates)を変化させるということを述べた。例えば、

もしある人が、穀物1ブッシェルを生産しうのと同じ時間(time)に、銀1オンスをペルーの地中からロンドンへ持って来ることができるならば、その時には、一方は他方の自然価格(natural price)である。もし新しいもっと容易な鉱山のために、ある人が以前に銀1オンスを得たのと同じくらい容易に銀2オンスを得られるならば、その時には、他の条件が等しい限り、穀物1ブッシェルが10シリングでも、以前に1ブッシェルが5シリングであった時と同じくらいに安価である。

11. それゆえわれわれは、わが国の貨幣を数える方法を持たなければならない。」〔「11.」は文節の番号〕(Treatise, pp. 50—51, 訳89—90ページ)

これはリカード的な意味での、すなわち同じ労働時間を投下した生産物は価値が等しいという意味での労働価値論を主張したものではない。ここに述べられている1ブッシェルの穀物と1オンスの銀は、すでに見た第4章の例とまったく共通しており、ペティは明らかに先の例を思い浮かべながら語っている。したがって、この穀物と銀とは、「同じ時間」に生産された全生産物ではなくて、そこから原料や食料などを差し引いた残りの地代ないし純生産物と考えるべきである。「銀1オンスをペルーの地中からロンドンへ持って来ることができるならば」という表現も、この銀が、生産された全生産物ではなくて、そこから必要な諸経費を除いた剰余であることを示している。ペティは、ここで、先の引用文と同じく、「同じ時間」に生産される純生産物が等価となることを主張しているのである。しかしこの引用文では、価値の源泉としての土地がまったく言及されていない。価値の尺度と源泉を労働に一元化しようとするペティの意図によって、ここでは純生産物の価値源泉を労働に還元する方向に、さらに一歩進んでいると言えるであろう。

ここで重要なのは、ペティが、最初に、「われわれは……貨幣の貯え(store)

の変化は諸商品の比率(rates)を変化させるということ述べた。例えば」と述べてから、その後に労働価値論と解釈される文章を続けていることである。つまりペティは、この労働価値論とされる文章を先に述べた貨幣数量説の例証と考えていたのであり、この文章では、新しい鉱山のために生産される銀の数量が2倍になると、それに反比例して銀の価値が半減し、その結果穀物の貨幣価格が1シリングから2シリングへと2倍になることが主張されているのである。ペティは、銀1オンスの生産に投下される労働量の半減が直ちに銀の価値をも半減させるというリカード的な労働価値論ではなく、銀の生産に要する時間が半減したことが銀の数量を倍加し、その結果として銀の価値が半減するという貨幣数量説を考えていたのである。だからこそ彼は、この文章のあとに、「それゆえわれわれはわが国の貨幣を数える方法をもたなければならない」と続けたのである。

ペティにリカード的な意味での労働価値論はないけれども、相対価格から区別される、商品それ自体に属するものとしての価値の観念は明確に存在している。ペティは、先の引用文において、穀物1ブッシェルの価格が5シリングから10シリングに騰貴しても、同じ時間に生産される穀物は「他の条件が等しいかぎり」「同じくらいに安価である」と述べ、穀物の価格と価値とははっきりと区別している。商品と貨幣との交換比率として表される価格とは別に、商品そのものに内在する価値の観念（後に購買力、実質価値、絶対価値などと名付けられる）がここに成立しているのである。このように価格から区別される価値の観念が成立して初めて、価格を測定し表現する貨幣とは別に、価値そのものを測定し表現することができるような不変の価値尺度が求められることになったのである。⁽¹²⁾

ペティは、穀物の貨幣価格が変動しようとも、「同じ時間」に生産される穀物の価値は「同じくらい安価である」と述べることによって、事実上、労働

(12) 馬渡、前掲論文、152ページ参照。

時間を不変の価値尺度として異時点間における穀物価値の比較を行っている。ペティのいわゆる労働価値論は、労働を唯一の価値源泉とすることによって一時点における二商品の交換比率を労働から説明する理論であるというよりも、むしろ、労働を不変の価値尺度とすることによって異時点間の貨幣価値と商品価値の変動を測定し、商品の貨幣価格の変動の原因を説明することを意図した理論であった。⁽¹³⁾

Ⅲ フランクリン

フランクリンは、ペンシルヴァニアにおける紙幣の増加発行を擁護するために執筆した『紙幣に関する小研究』(1726年)⁽¹⁴⁾において、ペティから引き継いだ労働価値論を発展させた。かれは、「紙幣(paper currency)の大量の追加が、その価値を大きく低下させるかどうか」を検討するために、「われわれは最初に貨幣一般の本性と価値とについて正しい観念を形成することが必要であろう」(*Inquiry* p. 263)と問題を提起して、以下の考察を始めている。フランクリンの場合にも、ペティの場合と同様に、労働価値論を必要としたのは、商品論ではなく貨幣論とりわけ貨幣価値変動論の問題であった。

フランクリンの見解を特徴づけるのは、かれがつねに商品交換を社会的分

(13) 商品の生産に投下された労働を不変の価値尺度とすることに十分成功しなかったペティは、他方で別の労働概念を不変の価値尺度として考えている。かれは「いかにして現在の貨幣と以前の貨幣とを比較するだけでなく、現在のすべての富(entire Riches)と以前の人々のすべての富とを比較するのか」(*Treatise*, p. 14, 訳19ページ)と異時点間の価値比較の問題を提起し、上述のように商品生産に投下された労働を不変の価値尺度とするばかりでなく、「貨幣でもっとも多くの労働者を雇った時代が、より多く富んでいたのである」(*Treatise*, p. 51, 訳91ページ)と述べて、雇用労働者数を不変の価値尺度としている。これは、支配労働価値説の原形であるといってよいだろう。ペティにおけるさまざまな価値尺度については、馬渡尚憲「W. ペティの経済学(下)」、東北大学『研究年報』第37巻第1号、1975年、59—61ページ、参照。

(14) Benjamin Franklin, *A Modest Inquiry into the Nature and Necessity of a Paper Currency*, 1729, in *Essays on General Politics, Commerce and Political Economy*. 以下では、*Inquiry*と略記する。

業として把握していることである。フランクリンは「交換の媒介物」(＝流通手段)としての貨幣が物々交換の不都合を救済するために「発明」されたことを指摘したあと、「貨幣は、それを通じて、またはそれによって、労働が労働と、すなわちある商品が他の商品と交換されるのであるから、交換の媒介物(medium of exchange)と呼ばれるのにふさわしい」と述べている(*Inquiry*, pp. 263—264)。このようにフランクリンは、商品交換を社会的分業として把握することによって、商品と商品との交換を労働と労働との交換と同一視することになったのである。この認識は、労働価値論の成立にとって画期的な意義を持っていた。

フランクリンは、流通手段としての貨幣の起源を「発明」によって説明したあと、その派生的機能として、価値尺度としての貨幣の成立を説いている。ここに述べられる事例は、明らかにペティから学んだものである。彼は言う。

「これら〔金と銀〕によって、とくに銀によって、他のすべての物を評価するのが普通である。しかし銀それ自身は一定の永遠の価値を持つのではなく、その稀少または豊富にしたがってより多くまたはより少なく価値があるのだから、価値の尺度にするのが一層適切な何か他の物を決めることが必要に思われる。私は、これを労働に求める。

他の物と同様に、銀の価値も、労働によって測ることができる。例えばある人は穀物の生産に従事し、他の人は銀の採掘と精練に従事するとしよう。一年の終わりかまたは他の一定期間の後に、穀物の全生産物と銀の全生産物とは、それぞれの自然価格である。もし一方が20ブッシェルで、他方が20オンスだとすれば、そのとき1オンスの銀は、1ブッシェルの穀物を生産する労働のねうちがある(is worth the labor)。……だから一国の富は、その住民が買うことのできる労働量によって評価されるべきであって、その住民が所有する銀や金の量によって評価されるべきではない。……交易(trade)は一般に労働と労働との交換にほかならないのだから、すべての物の価値は、上に述べたように、労働によってもっとも正しく評価される。」(*Inquiry*, pp.

264—267)

一見したところ、フランクリンはペティの議論をそのまま繰り返しているように思われる。銀は「その稀少または豊富にしたがってより多くまたはより少なく価値がある」という貨幣数量説の認識を前提としていること、貨幣に代わる不変の価値尺度を労働に求めたこと、また20ブッシェルの穀物と20オンスの銀とが交換されるという事例など、二人はまったく同じ認識に立っているかに見える。しかし子細に検討するならば、両者の見解は決定的な点で異なっていることがわかる。⁽¹⁵⁾第一に、ペティにあっては、20ブッシェルの穀物は「地代」であり、20オンスの銀は生産者の「費用をこえて貯えうる」貨幣であった。他方フランクリンの場合には、両者は「全生産物」とされている。ペティにおける、「銀の純生産高が穀物の全生産高の価格である」という命題が、フランクリンの「穀物の全生産物と銀の全生産物とは、それぞれの自然価格である」という命題に変えられたのである。この「純生産高」から「全生産物」への変更は決定的な意義をもっていた。ペティでは、等しい時間の労働が生産者の費用をこえて生み出す剰余が等しいとされていたのに対して、フランクリンにおいて初めて、等しい労働時間の投下された全生産物の価値が等しいと考えられるようになったのである。リカード的な等労働量交換という意味での労働価値説は、こうしてフランクリンに初めて登場した。

では、両者のこの違いはなぜ生まれたのであろうか。まず、労働と価値との関連についての両者の把握の質的な違いが指摘されねばならない。ペティの場合には、「同じ時間」に生産された純生産物としての銀と穀物とが等置されていたけれども、その労働「時間」と銀や穀物などの生産物とが同一視されていたわけではなかった。ペティにとって、労働は価値の源泉ではあって

(15) ペティとフランクリンの労働価値論の差異については、久保芳和『フランクリン研究』関書院、1957年、100—101、150—151ページを参照。

も、労働と価値とが同一視されてはいなかった。他方フランクリンは、「交易は一般に労働と労働との交換にほかならない」と考えるから、商品と商品との交換が労働と労働との交換に還元され、商品＝労働生産物と労働そのものがほとんど同一視されている。それゆえ、純生産物相互の交換だけでなく、全生産物の交換が等しい労働量の交換とみなされるようになったのである。⁽¹⁶⁾

さてペティとフランクリンとの第二の理論的差異は、不変の価値尺度としての労働についてである。貨幣数量説を前提として、貨幣に代わる不変の価値尺度を労働に求めた点で二人は一致しているけれども、その労働の内容が大きく異なっている。銀の価値をはかる不変の価値尺度は、ペティでは銀の生産に投下された労働であるのに対して、フランクリンでは、「1オンスの銀は、1ブッシェルの穀物を生産する労働の値打がある」と言われているように、銀と交換される穀物の生産に投下された労働が価値尺度とされている。言い換えれば、ペティでは、当該商品の生産に投下された労働が価値尺度とされたのに対して、フランクリンでは、当該商品と交換される等価物商品に投下された労働が価値尺度とされるのである。この認識も、商品と商品の交換、価値と価値との交換を労働と労働との交換と同一視したフランクリンの商品経済把握の一帰結であった。

IV 価値と価格——むすびにかえて

労働価値論とは、もっとも抽象的に言えば、「価値」と「労働」とのある関連を主張した理論である。この理論が成立するためには、まず価格から価値を分離し、さらに価値を労働と関連させるという二段階の認識が必要であった。

価格と価値を区別する認識そのものは、けっして新しいものではない。あ

(16) フランクリンに地代の理論的認識が欠如していたことも、おそらくペティとフランクリンの価値論の差異を生んだ理由の一つであろう。

る商品と貨幣との交換比率として（あるいは貨幣を媒介とする一商品と他の商品との交換比率として）表現される相対価格とは別に、ある一つの商品それ自体の内在的な属性としての価値が存在するという認識は、商品生産のある程度の発展とともに生まれてきた。「生産物の交換者たちがまず第一に実際に關心を持つのは、自分の生産物と引き換えにどれだけ他人の生産物が得られるか、つまり生産物がどんな比率で交換されるのかという問題である。この比率がある程度の慣習的固定性を持つまでに成熟してくれば、それは労働生産物の本性から生ずるかのように見える。」ある商品の相対価格の慣習的固定性は、その商品の生産に直接間接に関わっている社会のすべての人々の社会的諸関係と生産諸条件の固定性（とりわけ商品の生産に直接間接に費やされる労働時間の固定性）から生まれてくる。ところが生産過程を認識していない商品交換の当事者たちは、あたかも商品に一定の価値が内在するからその商品の相対価格は固定的であると見なすようになる。商品の相対価格の慣習的な固定性が、商品そのものに価値という属性が内在するかのような共同主観的な意識を人々にいだかせるようになるのである。

しかし商品に内在する属性としての価値の観念が、その商品の価格の慣習的な固定性から引き出されている限り、価値と価格とは十分明確に区別されることはできない。古代や中世において、価格と価値との区別は、しばしば、現実の価格と規範的価格、あるいは短期的偶然的な価格と長期的平均的な価格との区別（後に市場価格と自然価格の概念に整理される）を表現していた。その場合に価値は一つの価格にすぎず、価値と価格とは明確に区別されていなかったのである。

価格と価値とがはっきりと区別されるためには、両者が量的大きさにおいても乖離することが必要であった。それを引き起こしたのが価格革命である。新大陸から大量にもたらされた銀は、ヨーロッパ諸国の物価を数倍に騰貴さ

(17) K. Marx, *Das Kapital*, MEW, Bd. 23, S. 89. 全集訳, 第23巻 I, 100ページ。

せた。この歴史的経験は、一方では、貨幣の数量によって貨幣の価値が変動するといういわゆる貨幣数量説を生み出す。しかし、すべての商品の貨幣価格は騰貴しても、貨幣を媒介として交換されている諸商品相互の交換比率は変化しない。それゆえ、商品の貨幣価格とは別に、商品相互の交換比率を決定するような内的属性＝価値がそれぞれの商品に内在しているという観念が生み出されてくる。後にスミスによって「購買力」として表現されるこの交換価値ないし価値の観念は、貨幣数量によってたえず変化する商品の貨幣価格からはっきりと区別されるものであった。しかもこの価値（＝購買力）の観念が確立してくるにつれて、商品の貨幣価格は、この価値を表現する不正確な一表現形態にすぎないものとして理解されるようになったのである。こうして、価格と価値とは、のちに名目価格と実質価値（スミス）、相対価値と絶対価値（リカード）、交換価値と価値（マルクス）などの概念で整理されるような意味で、しだいに区別されるようになった。

価格と価値（＝購買力）とが区別され、しかも価格は価値の不正確な一表現形態であることが理解されてくると、その価値を測定する尺度が別に求められることになる。貨幣のようにそれ自体の価値がたえず変化する尺度では、異時点間の価値比較を行う場合に、商品の価値を正確に測定し表現することができないから、ここにそれ自体の価値が変化しない不変の価値尺度が探究されることになった。不変の価値尺度の探究は、二つの方向で行われた。一つは価値の原因が変化せず、それゆえ価値も変化しないような商品を価値の尺度とする途であり、もう一つは、価値の原因そのものを価値の尺度とする途である。第一の途は、ペティとほぼ同じ時代にロックによって試みられた。ロックの事例は、不変の価値尺度の探究が労働価値論とつねに結びつくとは言えないことを示している。というのは、ロックは、価値の原因を需給に求め、需給関係があまり変化しないと考えた穀物を不変の価値尺度として採用したからである。第二の途は、上述したようにペティとフランクリンがたどった途である。価値の原因が変化するにつれて価値の大きさも変化するから、

もし価値の原因＝源泉そのものを価値の尺度とすることができれば、つねに価値の変化を正確に測定することができると考えられたのである。

価値の源泉を不変の価値尺度にするこの試みが、労働価値論を生み出すことになった。貨幣を価値の尺度としているかぎり、価値の源泉が土地と労働の二つであると考えても直ちに理論的困難は生じない。しかし、貨幣に代えて土地と労働を価値尺度とする場合には、複数商品の価値を通約するために、価値尺度を土地と労働のどちらかに一元化することが絶対に必要となる。価値の源泉をそのまま価値の尺度としたペティは、価値の尺度を労働に一元化しようとしたとき、同時に、価値の源泉をも労働に一元化しなくてはならなくなった。ペティはその意味を十分に自覚していたわけではないが、しかしそれを遂行しなければならなかった。かれが価値の源泉を労働に一元化するためには、土地の産物とみなされていた地代を労働の産物として説明すること、さらに農業労働や鉱山労働などの具体的労働が、社会的総労働の一分枝として、同等な人間労働力の支出される同等な労働であり、そのかぎりでのみ価値を形成すること、これらのことを把握することが必要であった。ペティはその方向へ進み始めたが、最後まで土地を価値源泉とする考えを払拭しきれなかった。次に現れたフランクリンは、商品生産を社会的分業の唯一の形態として把握し、商品と商品の交換、価値と価値の交換を労働と労働の交換とまったく同一視したから、価値はすべて労働に還元されることになった。こうして初期労働価値論が成立した。